

雅楽だより

【目次】

- 国際ダブルリード協会より檄文 1
- 『體源鈔』とその時代 (6) 遠藤 徹 10
- 名器への幻想 東儀俊美 5
- 情報欄
- 調子について 安齋省吾 8
- 舞楽面陵王の無料貸し出し 日本仮面文化研究所 12
- 雅楽いろいろ Q & A ⑥ 芝 祐靖 9

第34号
発行

2013 (平成 25) 年 7 月
雅楽協議会

日本のダブルリード奏者の皆さんへ

2013年3月7日

IDRS (国際ダブルリード協会) 会長
Martin Schuring

箏篋 (Hichiriki) のリードの良材の産地が失われる可能性があるという悲劇的なニュースに接して衝撃を受けている。1200年以上も前から、最高品質の箏篋のリード材は、京都から大阪へ流れる淀川の河川敷で収穫されてきた。しかし、高速道路の建設工事により、この絶対不可欠の資源が永久に失われようとしていると聞く。

雅楽演奏に欠かせない重要楽器である箏篋のリード資源が破壊される。その衝撃の深刻さは私たちにもよく理解できる。葦原の破壊は雅楽の演奏と日本の音楽文化に決定的なマイナス効果をもたらすであろう。西洋音楽のあらゆるリード管楽器は (古代のバグパイプをも含めて) Cane (ケーン=葦=arundo donax) で作ったリードを使う。最上のリード・ケーンは、フランス・ヴァール地方の数か所でのみ育つ。世界中のリード楽器プレイヤーは皆が皆ヴァールに自生するケーンで作ったリードを使っていると言っても過言ではない。もし、このヴァール地域の資源が破壊され全滅すれば、西洋音楽文化に壊滅的影響を与えることだろう。私たちが淀川河川敷に育つ葦の危機を他人事とは思えないゆえんである。

雅楽は1200年以上の歴史と伝統を持つ芸術形式であり、日本の歴史と伝統そして文化の象徴でもある。そして完璧に保存されてきた雅楽とその熟練の演奏技能は日本独自のものであり何としてでも保全されなければならない。雅楽は1000年以上生き続けて来た保護すべき宝であり遺産である。高速道路工事で雅楽に必要な不可欠の産地を破壊するのは聖像を破壊するに等しい悲劇である。

IDRSは、ダブルリード奏者、楽器メーカー、熱狂的ファンで構成される世界的規模の組織で、会員数は世界50ヶ国に及ぶ。私たちは日本の宮内庁、民族音楽専門家、雅楽の愛好家、ダブルリードの同志たちと連帯し、淀川河畔～箏篋の魂が宿っている～の保護と保存の要求を断固として支持する。

(翻訳: 小関馨子)

世界中から 鶺鴒のヨシを守ろうの声

国際ダブルリード協会より檄文

新名神高速道路着工により、箏篋のリードの生育地である鶺鴒ヨシ原 (大阪府高槻市の淀川河川敷) のヨシの壊滅的危機を迎え、ヨシ原保存の署名活動などが行われている中、国際ダブルリード協会 (IDRS) より「淀川河畔」箏篋の魂が宿っている」の保護と保存の要求を断固として支持する」との力強い連帯と応援のメッセージが発せられました。

左記の檄文を出された国際ダブルリード協会は、世界50カ国に約4000人の会員を有するオーボエやファゴットなどダブルリードの奏者の集まりです。

この檄文の連名者の一人でもあり国際ダブルリード協会の中で唯一の日本人の役員・第二副会長であり、日本ファゴット (バスーン) 協会会長でもある菅原眸氏のご自宅でお話を伺いました。

「檄文の中に書いてあるとおりの気持ちです。音楽を演奏する同じ仲間として黙ってはいられない。特に雅楽は日本独自のもので、世界に誇れる歴史と演奏技能と芸術性を有しています。高速道路で破壊されたら取り返すことはできなくなります。歴史的な悲劇です。全面的に応援します」と話され、鶺鴒ヨシ原保存の呼びかけ人も快く引き受けてくださいました。

この国際ダブルリード協会の檄文が掲載されたのは管楽器専門月刊誌『パイパーズ』5月号381号 (「箏篋の音が消えてしまう」) お話 中村仁美の7ページにわたる特集記事) 中である。

檄文の掲載の経緯について『パイパーズ』編集主幹の杉原道夫氏は「この鶺鴒ヨシ原の問題については新聞紙上やNHKテレビなどでも取上げられていたもので前々から心を痛めていました。以前本誌の「和楽器シリーズ」で箏篋奏者として登場していた中村仁美さんに連絡をとり、詳しい話を聞いた



国際ダブルリード協会
第2副会長 菅原眸氏



Second Vice President

Hitomi Sugawara, President JBS
2-12-4 Higashi-machi Nishi Tokyo-shi
Tokyo 202-0012 JAPAN
Bus: 0424 21 4584

Secretary

Eric Stomberg, Associate Professor of
Bassoon
School of Music University of Kansas
1530 Naismith Dr., Room 460 Lawrence,
KS 66045
Bus: (785) 864-9717 Fax: (785) 864-5866

Past President

Nancy Ambrose King, Professor of Oboe
University of Michigan
3019 School of Music University of
Michigan Ann Arbor, MI 48109
Bus: (734) 764-2522 Fax: (603) 843-

Oboe Editor

Daniel J. Stolper
7 Hermosillo Lane Palm Desert CA
92260-1905
Bus: (760) 837-9797

Idrs On-Line Publications Editor

Yoshiyuki Ishikawa, Professor of
Bassoon
University of Colorado Boulder, CO
80309-0301
Bus: (303) 492-7297 FAX: (303) 581-
9307

Bassoon editor

Ryan D. Romine, Assistant Professor of
Bassoon

Shenandoah University 1460 University
Drive Winchester, VA 22601
Bus: (540) 327-4252

**Executive Secretary Treasurer Exhibit
Coordinator**

Norma R. Hooks
2423 Lawndale Road Finksburg, MD
21048-1401
Bus: (410) 871-0658 Fax: (410) 871-0659

Conference Coordinator

Marc Fink, Professor Emeritus of Oboe
School of Music University of
Wisconsin-Madison
455 North Park Street Madison, WI
53706-1483
Bus: (608) 263-1900 Fax: (608) 262-8876

At Large Members

Kristen Sonneborn, Principal Bassoon
Naples Philharmonic, Florida
1100 Rordon Ave Naples, FL 34103
Home: (239) 261-3042

David Weiss, Principal Oboe
Los Angeles Philharmonic (retired)
6226 Corning Ave Los Angeles, CA
90056
Bus: (310) 337-0962 E-mail:
weiss440@ca.rr.com

At Large-Business Liaison

Trevor Cramer, President
TrevCo Music Publishing
PO Box 1, Tellevast, FL 34270-0001
Bus: (941) 907-6944

きまして、署名活動なども行っていることを
知りました。何とかしなくてはいけない、と
の思いから、ダブルリードの演奏家の世界的

な組織である国際ダブルリード協会に鶴殿の
状態をお話し、コメントをお願いしました。
届いたのが掲載しました檄文です。

中村仁美さんから鶴殿ヨシ原を守る呼びか
け人のお願いをされまして、このようなお願
いは立場上全てお断りさせていただいてきま

したが、今回は黙っていられませんでしたが
で呼びかけ人を引き受けました」と熱い応援
の言葉をいただきました。

この檄文は現在の鶴殿のヨシの於かれてい
る状況がとても良く分かるように書かれてい
ます。

「ヴァール地域の資源が破壊され全滅され
ば、西洋音楽文化に壊滅的影響を与えること
だろう。私たちが淀川河川敷に育つ葦の危機
を他人事とは思えないゆえである。

(中略) 高速道路工事で雅楽に必要不可欠
の産地を破壊するのは聖像を破壊するに等し
い悲劇である。(中略) 私たちは日本の宮内
庁、民族音楽専門家、雅楽の愛好家、ダブル
リードの同志たちと連帯し、淀川河畔の葦の
魂が宿っている葦の保護と保存の要求を断
固として支持する」と結ばれています。

私たちにとってはとても励ましになる檄文
です。

海外の雅楽奏者などよりも

メッセージが届く

ハワイ大学で雅楽を正課として50年以上に
渡り教え、またケルン大学音楽部でも雅楽を
教えた社本正登司氏より次のメッセージをい
ただきました。



社本正登司氏



7 March 2013

To Whom It May Concern:

IDRS has learned the tragic news about the potential loss of reed-making materials for *Hichiriki*. For more than 1,200 years, the best reed making materials for this instrument have been harvested from the riverbanks of the Yodogawa River between Osaka and Kyoto. A planned highway will forever destroy this essential resource.

We understand the impact and the significance of the destruction of a vital resource for *Hichiriki*, a critical instrument for the performance of *Gagaku*. The destruction will have a serious negative consequence on the performance of *Gagaku* and the musical culture of Japan. In western culture, all reed wind instruments (including the ancient bagpipe) use reeds made from cane (*arundo donax*). The best reed cane grows only in a few areas of the *Var* region of France, and virtually all professional reed players in the world use reeds made from *Var*. If the resource for this reed cane were to be destroyed, its obliteration would have a catastrophic impact on western music making and culture.

Gagaku is an art form and a cultural icon with more than 1,300 years of history and tradition. *Gagaku*, and its impeccably preserved performance practice, are uniquely Japanese and must be preserved. *Gagaku* has existed for more than a millennium, and it is a treasure and a heritage that must be protected. The destruction of the essential resource for *Hichiriki* for the sake of a highway is iconoclastic and a tragedy.

IDRS is the worldwide organization of double reed players, instrument manufacturers, and enthusiasts with members in more than 50 countries. We stand together with the Imperial Household Agency of Japan, ethnomusicologists, *Gagaku*-lovers and our fellow double-reed artists, and emphatically support the call for the protection and preservation of the riverbanks of the Yodogawa River, where the soul of *Hichiriki* resides.

Sincerely,

The IDRS Executive Board

President
 Martin Schuring, Professor of Oboe
 School of Music Arizona State
 University-0405 Tempe, AZ 85287-0405
 Bus: (480) 965-3439 Fax: (480) 965-2659

First Vice President
 Keith Sweger, Professor of Bassoon
 Ball State University Muncie, IN 47304
 Bus: (765) 285-5511 Fax: (765) 285-5401

ハワイ雅楽研究会

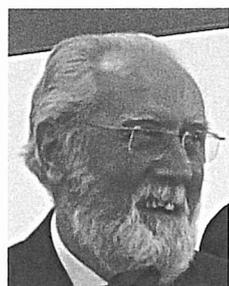
社本正登司

「ハワイ大学音楽学部雅楽コースには毎年10名以上の学生が、雅楽を学び単位を取っています。東洋音楽を学ぶ学生は、まず日本の雅楽を学ぶことから始めます。日本にいると気づかないかもしれませんが、雅楽は世界的な宝物であることを忘れないで欲しい。日本人は、往々にして世界から見たら大変な日本の宝物を見過ごしがちで無関心である。

もし鶴殿のヨシが絶滅するしたら世界中の損失である。雅楽は世界の宝であることを日本で暮らす人たちはもっと知って欲しいし、考えてもらいたい」

ドイツ ケルン大学より

ハワイの社本正登司氏と共にヨーロッパで唯一の雅楽の演奏団体であるケルン雅楽アン



ロベルト・ギンター氏

サンプルを誕生させたケルン大学名誉教授ロベルト・ギンター博士より次のメッセージが届きました。

ケルン大学音楽部名誉教授

ロベルト・ギンター

「筆薬の舌の原料になる鶴殿ヨシ原に高速道路が建設されると聞き、大きな関心を持っていました。鶴殿ヨシ原は国際的にも貴重な雅楽という文化遺産を下支えする重要な湿原、

(広辞苑より)【檄】①昔の中国の徴召または説諭の文書。木札に書いたという。めしづみ。

②敵の罪悪などを挙げ、自分の信義を述べて、衆人に告げる文書。檄文。檄書。

どうか後世にも残して頂きたいと強く望んでいます」

韓国 ソウル大学より

前韓国国楽学会会長で、ソウル大学で教鞭もとられ、また日本の雅楽にも造詣が深く、昨年10月の紀尾井ホールでの「朝鮮通信使」の公演では徳丸吉彦氏と対談された黄俊淵教授よりメッセージが届きました。



黄 俊淵氏

前韓国国楽学会会長 ソウル大学校 音楽大学国楽科教授

黄 俊淵

「筆楽のリードの生育地である鶴殿ヨシ原に高速道路が建設されるという話を聞き、とても驚いています。現在の韓国の雅楽は、中国の宋の時代に当時の高麗へ伝えられたもので、現在も文廟などで演奏されています。韓国の雅楽と日本の雅楽は中国からの伝来の経路は異なっていますが、共に大切な文化です。絶やすことなく後世の人たちに伝えていきたいと思います」

アメリカ ニューヨーク

コロンビア大学より

2006年9月にニューヨークのコロンビア大学には雅楽コースが新設され、毎年大学内で演奏会を開催すると共に、数名の生徒さんが来日し雅楽を学んでいます。(「雅楽だよ

り」7、9、11、12、31号参照)
そのコロンビア大学のバーバラ・ルーシュ名誉教授よりメッセージが届きました。



バーバラ・ルーシュ氏

コロンビア大学名誉教授

バーバラ・ルーシュ

「筆楽のリードの生育地である鶴殿ヨシ原に高速道路が建設されるという話を聞き、とても心を痛めています。日本の文化でもあり、世界の文化でもある雅楽を守るために心より応援します」

イタリア ローマより

イタリアで東アジアの音楽文化を紹介した『東アジアに於ける音楽と伝統』を2010年に出版するなど、イタリアで日本の雅楽も含め東洋の音楽の研究をすすめているダニエレ・セステイリ氏よりメッセージが届きました。



ダニエレ・セステイリ氏

元ローマ大学講師

ダニエレ・セステイリ

「ローマ大学の学生が日本に留学すると、

日本の雅楽に感動し、学んできます。今年は南都楽所にお世話になっていると聞いています。筆楽のリードの生育地に高速道路が建設されると聞き、耳を疑いました。なんとしても雅楽の材料が無くならない様にしてほしい。1000年以上伝えられている音楽は世界の宝です」

中国 二胡奏者より

中国の民族楽器である二胡の教室を東京で開き、また中国と日本の文化の交流に多大な貢献をされている楊智氏よりメッセージをいただきました。



楊 智氏

二胡奏者 楊 智

「私は1500年以上前から伝えられている二胡を演奏し、東京で多くの日本人に教えています。二胡の材料はインドの紫檀が最高ですが、インドは紫檀の輸出を止めました。現在アフリカの紫檀を使用していますが、これも値段が高騰し良い楽器を手にするのがとても難しくなっています。楽器の材料が手に入らないのは楽器が無くなったも同然です。筆楽が千年以上前、中国からどのような経路で日本に伝わったかは分かりませんが、日本に伝わった筆楽が無くなるとしたらとても悲しいことです。ヨシを守り、雅楽を守り、共に文化を生かしながら中国と日本の友好を深

めていきたいと願っています」

SAVE THE 鶴殿ヨシ原 雅楽を未来につなぐ実行委員会代表の中川英男氏(大阪楽所代表理事)よりコメントが寄せられました。



中川英男氏

「国際タブ
ルリード協会
様よりの熱い
檄文、及び海
外の雅楽関係
者の方々から
メッセージを寄せていただき、とても心強く
思っています。今後は鶴殿のヨシを守る運動
をさらに大きくし、絶対に鶴殿ヨシ原を守り、
筆楽の最良のリードを後世に残す決意をより
一層強くしています。署名も7月末を目途に
10万筆を目指して続けていきます。「雅楽だ
より」の読者の皆様も署名のさらなるご協力
を今後ともお願いいたします」
(今号も署名用紙を同封しております)

第2回検討会が開かれた

「新名神高速道路 鶴殿ヨシ原の環境保全
に関する検討会第2回」が6月23日(日)午
後2時半より、高槻市市民会館で開かれた。
主な議題は、鶴殿地域全体の既往調査結果の
報告、筆楽用のヨシと一般的なヨシの育成状
況の違いを把握するための調査報告ほか。
(詳細は次号に掲載します。第1回検討会
の内容は「雅楽だより」33号に掲載)

名器への幻想

元宮内庁楽部首席楽長

東儀 俊美

(1)

雅楽は5世紀の中頃、新羅の音楽が始めてその音を日本に響かせて以来、唐・百濟・高句麗・林邑・天竺等様々な国から約300年以上の年月をかけて渡来し、幾多の変遷を経て「日本の雅楽」へと姿を変え、現在まで伝承されてきた。渡来した当時は、勿論彼の国の人々が夫々の国から持ってきた楽器を用いて演奏したに違いない。

では、彼らはどうな楽器を使って演奏したのだろうか。日本には当時の文献が無いので実際の処は解らないのだが、中国の唐時代の文献に残された楽器編成と、正倉院に残された楽器及びその破片から、ある程度のことはいい知ることが出来る。

先ず唐時代の楽器編成を見ると、
「天竺楽」には、楽用鞞鼓、箏、横笛、
毛員鼓、都曇鼓、鳳首篳篥、
琵琶、五絃琵琶、銅鈸、その他。

「高麗楽」には、楽用彈箏、臥篳篥、堅篳篥、
琵琶、五絃琵琶、笙、横笛、小篳篥、
大篳篥、桃皮篳篥、簫、義嘴笛、
腰鼓、齊鼓、担鼓、貝、その他。

となつている。演奏人数はほとんどの楽器が一人ずつだが、天竺楽のなかで、箏、琵琶、

五絃琵琶だけ二人になっている。現在雅楽に使われている楽器より使われていない楽器の方が多しという事は、現在演奏されている雅楽とは似ても似つかぬ音色と旋律だったと思われる。

また、唐時代の編成を見て気がつく不思議なことは、「天竺楽」には「笙」を使わず「高麗楽」では「笙」が使われていることである。日本では全然反対に、「天竺楽」では「笙」を使い「高麗楽」では使っていない。

では次に、正倉院に残されている楽器を見ると、琴、瑟、堅篳篥、五絃琵琶、阮咸、笙、方響、尺八、七絃楽器、二の鼓、腰鼓、がある。そして、日本の文献に名前だけ残る楽器名としては、堅篳篥、大角、小角、振鼓、四の鼓、拍盤、百子、銅鉢子等あるのだが、実物は存在しない。(現在雅楽で使用されている楽器は除いた)

唐楽、高麗楽、天竺楽、そして林邑楽も、最初は日本人が演奏したはずはない。恐らくそれぞれの国の人が、こうした様々な楽器を用いて賑やかに演奏したのである。

ところで、日本にも古代から「日本独特の音楽」がある。それは「国風歌舞」として現在も伝承されている「神楽歌、東遊、大歌」

などの歌と舞である。そしてそれ等には日本独特の楽器が使われていた。和琴、神楽笛、そして笏拍子である。

和琴は、「琴弾き埴輪」として知られる埴輪が出土しているように、非常に古くからあったらしい。六本の絃が張ってあるが(一説では古くは五本だったという)中国に六絃の琴はないので、この琴は日本独特の楽器だと思われる。

神楽笛もこの太さ、音律の笛は日本だけのものである。

笏拍子、これも楽器だとすれば、やはり日本だけのものである。

「国風歌舞」は外来の音楽とは違い、どちらかといえば精神性の強い静の音楽である。そのような音楽に親しんでいた都人が初めての外来音楽をどう聞いたのだろうか。

遙かに時は流れて明治のはじめ、文明開化の日本にヨーロッパから今まで見たことも聞いたことも無い新しい音楽が入ってきた。西洋音楽の登場である。この時の日本人の反応が飛鳥の昔、初めて雅楽を聞いた日本人の驚きと共通しているのではないかと思われるので書いてみよう。

幕末、日本で最初に異国の音楽に接したのは長崎の人達だった。「長崎名勝圖繪」という本に蠻方の楽器のことを「ピヨオル・板張りの提琴なり。此方用いる如く皮を以つて張ることをせざるなり。トロンムル・太鼓なり。トロンムベツト・喇叭なり。ワルトホーン・曲り喇叭。テリヤングル・銃杖を三角に曲げて籬をいれ、これを桴にて撃つなり」と解説が

書いてある。

では、実際の音楽を日本人はどう聞いたのだろうか。また、西洋人は我国の音楽をどう聞いたのだろうか。フランス人のジャン・クラセという人が、享保19(1734)年パリで出版した『日本正教使』という本に「我が国のリュウト・ウイヨロン・トラムベツト及び総ての音楽は日本人の耳に染とせず、日本人の音楽は亦我が国人にありては唯耳に喧騒を感じるのみ」とあつて、お互いあまり好感を持ってなかったようである。しかし昔から日本人は、良く言えば進取の気性に富み、悪く言えば新しいものの好き、新しいものには野次馬的興味を強く示す性質を持っている。

寛政12(1800)年に来日したヘンドリック・ツーフという人が日本最初の楽器輸入業者になり、トロンムル(太鼓)、フロイド(横笛)、ヒヨール(提琴)、ワルトホーン(曲喇叭)、オルゴル(自鳴琴)などを輸入した。それを、長崎・丸山の遊女たちが先ずその奏法を会得し、次第に広く広まっていったらしい。幕末の人たちは鎖国のなかにあつても、種々な手段で異国に対する情報を知識の中に取り入れていたらしく、物珍しさも手伝つて意外に早く理解していったらしい。

では飛鳥の場合はどうだったのだろうか。初めての雅楽が日本で奏されてから200年以上過ぎた奈良時代になって、聖武天皇の天平年間(729~749)になると「遣唐使」などによって、異国文化への知識が養われてくると共に、「習つてみよう」「聞いてみよう」という人たちが増えていったと

考えられる。

始めは異国の人たちによって日本には無かった楽器ばかりで演奏されていた現在の雅楽の原型とも言える音楽は、次第に日本人の演奏家が増えるにつれて、遂に9世紀半ばから約100年の歳月をかけて行われた、後年「楽制改革」と呼ばれる「雅楽の日本化」という出来事によって、もとの音楽とは全く違う日本の雅楽として誕生する。使う楽器を三管(笙・箏・篳篥)一絃(琵琶・箏)三鼓(鞆鼓・太鼓・鉦鼓)の8種類とし、総ての音楽を唐楽と高麗楽、二種類のどちらかに入れて統一し、60種類もあった音階は6種類(志越調・平調・双調・黄鐘調・盤渉調・太食調)にまとめた。こうして日本的な変貌した雅楽は、やがて貴族たちの趣味と教養のブームにのって平安時代、雅楽の爛熟期を迎える。

(2)

大宝元(701)年「雅楽寮」が設置され、それが発展して「楽所」「大歌所」などとなり專業樂人はいたのだが、平安時代、雅楽が貴族階級の趣味と教養の一種として繁栄した時代には、雅楽の演奏者も聴衆もほとんど彼ら貴族階級の人々だった。歴代天皇も何かの楽器を演奏された。なかには堀川天皇のように神楽の秘説を相伝されていた天皇までおいでになった程である。

平安時代の貴族達はどんな楽器を持っていたのだろうか。また、楽器作りの名人がいたのだろうか。これの答えは難しい。絵画・彫刻と違い、現物が残っていないし文献もほと

んどないからである。

元禄3(1690)年に書かれた楽書『楽家録』の「巻四十一、音楽珍器」に昔の名器といわれる楽器が書いてあるのでその幾つかをのぞいてみよう。(現代訳筆者)

(一) 和琴

鈴鹿 江談抄という本によれば「累代天皇の渡し物である」という。
河霧 上東門院が持つておられた和琴とか。この楽器は『拾芥抄』という書

によれば、承平9(938?)年の目録に書いてある。とあり、萬治4(1661)年正月の禁裏炎上で消失したとなっている。承平という年号は7年までしかなく、また木の楽器が700年も残っていたというのも少々怪しいような気がする。

(二) 箏

秋風 延喜帝の御物だが、崩御の時山稜に納めたという。
州濱 四辻公理卿の物で、螺鈿紋で州濱があり、小野小町の箏だと言われるが、やはり萬治4年に消失したとある。

佐佐波 伝えによれば、古くは小督局が弾いたと伝えられ、玉戸の中に桐の紋があり、象牙で作られているとか。現在(元禄3年)嵯峨の新常寂寺にある。

(三) 琵琶

玄上 村上天皇の御物。撥は水牛。桴面に馬上で打球をしている書がある。

玄象

仁明天皇の御物。紫槽槽の一枚板。撥面黒象を畫いてあり、唐の琵琶である。

虎

一説によれば佐藤忠信の琵琶で、常陸国水戸の寺にあると言われる。

(四) 笙

大蚰氣繪 官物。管の上下に彫物があった。管の上に鳳凰が、管の下には一寸ほどの人形の彫物。(中略)崇徳天皇の保延4(1139)年内裏炎上の時焼失。

天啓

空穂丸

太子丸

(五) 篳篥

海賊丸

和邇部用光の管。又の説によれば、雅楽寮の人々が宇佐神宮に向かう船に乗っていて海賊に襲われた。その時、茂光という樂人が小調子を吹いたところ、海賊はその音に感じ入って退散した。それで海賊丸という官物。古い楽器だったが、萬治4年の禁裏炎上の時焼失した。

(六) 横笛

葉二 博雅三位の笛。「朱雀門の前で終夜の後宇治平等院建立の時、経藏に納められたという。天下第一の笛である。

薄墨

源頼義の笛。駿河の久能寺に納めてあると言われる。

これ等は書かれている名器のほんの一部に過ぎない。この他にも鞆鼓・太鼓・鉦鼓から面に至るまで盛り沢山である。しかし、これ等の名器がどこに残っているというのは聞いたことが無い。もしかしたら夫々ゆかりのある処にひっそりと存在するのかもしれない。

『少右記』などの平安時代の日記類を見ると、禁裏の火災が実に多いのに驚かされる。

『日本紀略』に「康保2(965)年7月4日、今日子時雅楽寮七間舎一宇失火、楽器皆焼亡云々」とあって、これは火元が雅楽寮だったので保管していた楽器と装束が灰になってしまったのは当然だと思われるが、この他にぎつと拾い出してみても、天元3(980)年11月、同5年11月、長保元(999)年、同3年、寛弘2年など、わずかに10年余の間に5回も火災を起している。その度に多少の差はあれ楽器などが焼失しているとすれば、演奏にも支障を来したであろう。当時から笙・篳篥・笛などの管楽器は個人が所有していたとしても、打楽器や絃楽器などの大きなものは「楽所」など禁裏内に保管していたのだろう。

荻美津夫著『平安朝音楽制度史』に次の様な記述がある。

「時の堀川天皇の御所は堀川院にあつたが、寛治8(1094)年10月24日、大宮東二条南小屋より出火した火は、折からの強い西風によって堀川院に延焼が迫ってきたとき、

鈴印辛櫃・御劔璽宮などと共に管絃具も取り出したとある。この管絃具とはふだん清涼殿調度品として備えられている横笛や琵琶などの名器のことと思われる」この記述によっても名器といわれる楽器の多くは御所にあつたことが伺われる。そして應仁の乱という決定的な火災によつて御所は勿論、殆どの貴族の邸宅も戦禍にあつて、恐らく多くの名器が灰になつたのではないだろうか。いつの時代にも戦禍というのは文化財を損失させる。第二次世界大戦とその後のも、貴重な楽器類の焼失と海外流失が多々あつたと聞く。

江戸時代になり、天下が統一されて戦いのない平穏な世になると、大名家が装飾品を兼ねて雅楽器を備えるようになった。なかでも彦根の井伊直亮は雅楽に並々ならぬ関心を持ち、自らも雅楽の演奏をすると共に、古い雅楽器の収集にも力をいれた。「大老」という地位も利用したのだろう。寺社・公家・楽家などから実に多くの名器を集めている。

(3)

「名器」とはどんな楽器を言うのだろうか。この定義は非常に難しく、また人それぞれの見方で違つてくるのだろうが、私は名器といふのは根本的に二種類に分けられると思つている。それは、①美術品として価値の高いもの。②美術品の価値は少ないが演奏して良い楽器、である。

美術品の価値の高い名器は、笙・琵琶・箏のように装飾のほどこしやすしい楽器に多い。笙でいえば、頭(竹を挿す吹口のついた素型

の部分)に螺鈿の象嵌や金銀で高度な蒔絵や彫刻をしたり、竹を止める帯に銀を使つて細かい細工をしたりしている。箏は頭部と尾部に紫檀を張り、州濱文様を螺鈿細工にしたりする。琵琶もまた同様である。笛・箏は楽器自体には細工が出来ないので入れ物(箏篋は管箱、箏は箏筒という)に凝っている。生地は黒漆が多いが、なかには漆に金をいれた梨子地に金・銀・朱で紅葉を散らしたり、金銀ですずきを描いたりと実に美しい。そして、主に文様に因んだ銘がついていたりする。例えば、五鳳丸という箏は頭に鳳凰の蒔絵があり、落葉という箏は紅葉が散つている。という具合である。ただし、美術的価値の高い楽器が実際に演奏して良い楽器とは限らない。前述の彦根・井伊家の収集品の中に、江戸時代に作られた象牙の笛とか箏、また鉄で作つた笛とか陶器に染付けをほどこした箏などであるが、これ等は専ら美術品としての楽器であつて実際の演奏をしたとは考えられない。

意外に何の装飾もない素箏が弾くと良く鳴つたり、無名の何と言う事のない箏が音の抜けが良かったりするものである。それか②のグループに属する楽器達である。前にも書いたように、箏とか箏という楽器は細工を施して美術品にすることは出来ない。またこれ等の楽器は、演奏する人間が自分で作つたものらしい。従つて美術品としての価値はないのだが、良い楽器は見ただけである程度判るものである。表現としては難しいのだが、あえて言えば「姿が良い」とか「伸びやかだ」

「清々しい」などとなるのだろうか、見るからにバランスよく伸び伸びとして素直な、そして何となく落ち着きと静けさを感じさせる楽器は演奏しやすことが多い。

楽器の製作者にはどんな人がいたのだろうか。絵画や彫刻と違つて名前や経歴の判つていない人物は殆どいない。特に笛とか箏は演奏者が自分で作つたらしいのと楽器に名を入れるスペースもないせいもあつてか、作者の判つていない楽器を私は知らない。笙に関しては事情が少し違つて僅かではあるが作者の名が残っている。一番古いのは、12世紀前半(平安時代後期)奈良の正暦寺の僧慶俊が知られている。経年のため残つていない楽器は少ないが、見る人に伸びやかで素直な感じを与える笙である。鎌倉時代初期、奈良の信貴山にいた僧の行円、この人の彫つた舞楽面も残されている。行円より少し後の同じ信貴山の僧で頼尊。ただ、この人たちが彫金・蒔絵までを自らやつたのかどうかは私には知らない。琵琶・箏になると残つていないのは鎌倉から室町以降なので、作者の判つていない楽器も多い。

怪しいのが多く、あまり信用できない。結局、正倉院に残る五絃の琵琶に代表される歴史的に価値のあるものとか、美術品として優れている物を「名器」という名前と呼んでいるのだろうか。

演奏家は皆夫々何年、何十年と使つて愛用の楽器を持つていて、楽器というのは人間と同じで種々な癖を持つていて、持ち主以外の人には中々使いこなせない。その癖を克服して自由に使いこなしている持ち主にとつて、その楽器に銘はなくても名器と言えるだろう。自分の楽器を「悪い楽器だ」と思つていたら決して良い音では鳴つてくれないだろう。勿論、より良い楽器を欲しいとは思つても取り敢えず殆どの人は現在付き合つてい

る楽器を悪くは思つていないのである。私も父の使つていた箏を自分の楽器にしてから50年以上になるが、持つたとき感じる私の癖によつて出来た指穴の微妙な擦り切れ方とか、それによつて生じた楽器の歪みなど、他の楽器には無い安定感がある。私にとつてこの箏は「名器」なのである。

「名器」とは誰もが認める、歴史的・美術的に優れた名器もあれば、誰も知らなくても持ち主一人だけの名器もあるのである。

『企画展 雅楽への誘い―和楽器の世界―』編集・発行 熱田神宮宝物館 1998年より転載)

調子について

前宮内庁楽部首席楽長

安齋省吾

管絃の歴史と構成

雅楽の演奏形態は大きく分けて、舞を伴う舞楽、雅楽器の伴奏で歌う歌謡、そして楽器だけの演奏である管絃の三つに分類することができる。日本古来の国風歌舞をどこに入れるかは、起源系統によるか演奏形態によるかで異なってくる。

管絃は、外来音楽である唐楽や高麗楽などの舞楽の曲、あるいは純然と器楽のために作られた曲、歌謡(朗詠、催馬楽)などを自ら奏しむために生れた演奏形態である。したがって朗詠、催馬楽も大きな意味での管絃の枠の中で演奏されている。ただし、高麗楽の管絃は、明治撰定譜(様々に伝えられてきた雅楽曲を統一した明治時代の楽曲譜)に残ってはいるが、現在ほとんど演奏されることはない。奈良時代に大陸から種々雑多な音楽が渡ってきたが、平安時代におよそ百年をかけて樂制改革を行い、取捨選択して日本人の生活感情に合わせて変化させ、独自の合奏音楽を作り上げた。それが今日まで伝承されている管絃である。したがって管絃に用いられている楽器は大陸伝来のものだが、楽器編成や楽器の用いられ方は日本独自のものといえる。例えば、独奏楽器であった琵琶が、日本の管絃では合奏の中で和音やリズム楽器として用いられるようになった。

■ 管絃に用いられる楽器

- 三管 (三種類の管楽器) : 笙・篳篥・笛 (和音・旋律)
- 両絃 (二種類の絃楽器) : 琵琶・箏 (リズム・和音)
- 三鼓 (三種類の打楽器) : 鞀鼓・太鼓・鉦鼓 (リズム)

こうしてできた管絃は、皇室を中心とする貴族階級、有力寺社によって伝承されてきた。天皇は琵琶を奏するのが通例で、鑑賞するだけだけでなく、自らも演奏して楽しむ教養として愛好されていた、宮中で催される演奏会を「御遊」と呼び、演奏曲目を「呂」と「律」に分け、各々を五曲から七曲演奏することが多かったようである。

演奏は、まず調子あるいは音取、次に催馬楽があれば催馬楽を演奏し、その後に楽曲が続く。朗詠は曲間に演奏される。楽曲の演奏の順は、まず笛の音頭(主奏者が独奏部分を演奏し、鞀鼓、鉦鼓、そして太鼓が続き、太鼓の右桴を打つ所から全管楽器が入る。それから小拍子(小節)となり、二つずつ遅れて面琵琶(琵琶の主奏者)、面箏(箏の主奏者)、琵琶の助絃、箏の助絃の順に演奏に加わっていく。最後の太鼓のところで助管と助絃が止め、主奏者のみで止手を奏して終了する。

調子とはなにか

調子という言葉は、主に音高、音色、音程または六調子などの音階の意味に用いられる。また、他にも多くの意味に使われ、楽曲を奏する前の、その曲が属する調子(音階)の雰囲気や醸し出す意を含んだ、短いフレーズのことも「調子」という。

洋楽のハ、二、ホ(C、D、E)に相当する音名は雅楽にもあって、一オクターブを十二に分け、それぞれ固有の名前を付けている。それを十二律、または十二調子といい、これは中国の十二律に倣って新たに日本でまとめられたものである。

中国古代(周代)では十二の音にそれぞれ、「宮音階」「商音階」「徵音階」など七つの音階があり、理論上は計八十四の音階(調)があると考えられていたが、実際には七つの音に「宮」「商」「角」「羽」の四音階で二十八音階だったといわれている。

日本に渡来して実用化されたのは、その中の「六調子」と「枝調子」である。六調子は「老越調」「双調」「太食調」(以上「呂」)、「平調」「黄鐘調」「盤涉調」(以上「律」)に分けられた。また、枝調子は本調子に吸収され、絃楽器の調絃法と音取にその名を留めるだけとなっている。

■ 枝調子を吸収した調子

- 平調 ↑ 性調、道調
- 太食調 ↑ 乞食調
- 黄鐘調 ↑ 水調
- 老越調 ↑ 沙陀調

■ 日本の十二律とその対応音階表

和名	漢名	洋名	和名	漢名	洋名	和名	漢名	洋名
和名	漢名	洋名	和名	漢名	洋名	和名	漢名	洋名
壹越	黄鐘	D	下無	姑洗	F#	鸞鏡	夷則	A#
断金	大呂	D#	双調	仲呂	G	盤涉	南呂	H
平調	太簇	E	鳧鐘	蕤賓	G#	神仙	無射	C
勝絶	夾鐘	F	黄鐘	林鐘	A	上無	応鐘	C#

六調子の音階表



芝祐靖監修『雅楽入門事典』・押田良久著
『雅楽鑑賞』他参照
(『国立劇場 第七二回雅楽公演 管絃 志
越調と平調』2013年3月2日公演プログ
ラムより転載)

雅楽いろいろQ&A⑥

打ち物の奏法

芝祐靖

Q-6

打ち物のタイミングがよくわかりません。同時だったり少しずれたりしているように聞えますが、それは意識的にそうしているのでしょうか、偶然そうなっているのでしょうか。例えば笛の音頭で鞆鼓が入る時、笛と同時に打つのが良いのでしょうか。そして、その時の鉦鼓は鞆鼓と同時なのか少しずれるのか？そもそも雅楽において「同時」の概念とは？初心者の素朴な疑問です。

A-5

打ち物の奏法について古い楽書を見てみましたが、打つタイミングについて記されたものは見つけれませんでした。「ズレ打ち」について私の思いを述べたいと思います。

平調・越天楽を例とします。演奏諸員が揃って楽器の調整が整い、演奏が始まります。

平調音取が終って越天楽が始まります。まず鞆鼓の方(長老)が撥を構え、太鼓、鉦鼓も撥を構えます。そして龍笛の方がおもしろに越天楽の音頭を吹き始めます。

略譜をご覧ください。「略譜A」は通常の打物譜に記されているもの。「略譜B」は演奏時のズレを表したものです。Aのように笛旋律と同時に鞆鼓と太鼓・鉦鼓が打ちますと、

【略譜A】

ト ラ ロ ヲ ル ロ ・ タ ア ロ ラ ア .
正 来~~~~~ 正 来~~~~~
金 金 百

【略譜B】

ト ラ ロ ヲ ル ロ ・ タ ア ロ ラ ア .
正 来~~~~~ 正 来~~~~~
金 金 百

互いに音を消しあっています。Bは、龍笛の旋律と打楽器の打ち込みが一瞬ズレていますが、これは龍笛の奏者の「トラロ」の音の移り変わりが全奏者に伝わるように、打ち物をズラします。

龍笛奏者は、自分のテンポで吹くのではなく、打ち物奏者を誘い込むように吹くべきです。打ち物奏者は笛旋律に打ち込むのでは

なく、笛の流れに沿うように打つべきでしょう。

打ち物のズレ方は早業と延業で異なります。早業はほんの一瞬、0.2秒程度、延業は0.5秒ぐらい。これは楽曲の旋律によって変わります。また打ち物をズラすのは何処までなのでしょう。楽曲によって異なりますが、合奏となつて拍節が定まってきたら、ズラすことなく楽曲の流れに乗りましょう。

丁度、せせらぎが大河に注ぐように。

《まゆつば談義》

「ズレ打ちについて」

平安時代「御遊」という管絃合奏が行われました。おもだった演奏者の公卿たちは御殿の中で演奏しましたが、鞆鼓・太鼓・鉦鼓と助管は地下楽人たちが受け持ち、庭先の筵に座して演奏しました。

御殿の中で吹き始めた龍笛の音頭は、庭先の打楽器奏者に少し遅れて聞えます。そのためどうしてもズレ打ちになりました。

このズレ打ちが「伝統」となつて後世に伝えられたもの？かもしれません。

「雅楽における《同時》について」

時間的な「同時」は旋律や響きを堅くし、深奥感が損なわれます。滔々とした雅楽合奏の流れの中には、笙の「手移り」や箏の「エンバイ」(艶唄?)があつて、頻りにテンポの変化があります。メトロノーム演奏は出来ません。指揮者を置かないのもこのためでしょう。

古楽書・古楽譜でたどる

雅楽の歴史(14)

『體源鈔』とその時代(6)

方磬をめぐる

東京学芸大学准教授

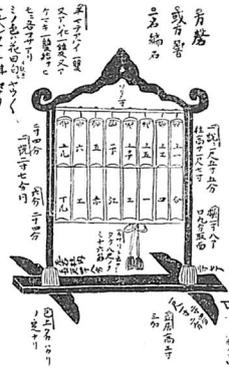
遠藤 徹

方磬(方響)は音律の異なる十六枚の鉄板を、上下二段に分けて吊り下げ、二本の撥で打って鳴らす打楽器です。正倉院に鉄板九枚が現存し、雅楽寮の唐楽師・唐楽生のなかに「方磬師」「方磬生」が置かれていたことから奈良時代には唐楽で用いられていたことが知られています。

方磬は平安末期に再び史料に頻出するようになり、住吉大社神主津守国基の娘のシラマクという女性や九条兼実や鴨長明の琵琶の師として知られる中原有安なども奏したことが知られます。この平安末期に用いられた方磬については『統教訓鈔』などに記載がみえ、すでに方磬の伝承が絶えてしまった時代の『體源鈔』でもそれらをそのまま引き載せています。しかし『體源鈔』では、前代の文献にとどまらず独自の方磬に関する伝えが附加されている点に注目されます。

巻四では『統教訓鈔』からの引用の後に、治秋(統秋の父)自筆という方磬の詳しい図を載せ、当時は絶えてしまったものであるが、後生のために載せた旨が記されています。

さらに注目されるのは、少し離れた巻十一に播州浄土寺に伝来していた方磬の音律が記されていることです。統秋が聞き取って、同道した今橋熙秋と互いに確認した上で記したもので、それによると浄土寺伝来の方磬の音律は下段の右端から壹越(d)、平調(e)、



『體源鈔』方磬の図

下無(f#)、双調(g)、鼻鐘(g#)、黄鐘(a)、盤涉(h)、神仙(c)、上段は左端から上無(c#)、壹越(d)、平調(e)、下無(f#)、双調(g)、鸞鏡(a#)、断金(d#)、勝絶(f)だったといえます(オクターブの相違は記されていません)。そして浄土寺の方磬(年代不詳)の音律が当時の音律と相違がないことを主に報告したところ主上は感銘をうけたことも付記されています。

ところで、笙をなさっている方はすぐに気がつくかと思いますが、この方磬の音律は笙の音律とよく似ています。それゆえ方磬の音律は笙の竹名で、凡、乙、下、十、美、イ、七、比(以上、下段、右から左へ)、工、言、上、八、千、(以上、上段、左から右へ)などと示されることもありましたが(方磬の譜字は「合、四、一、」などといった別のものがあります)。この場合、上段の残りの四つの表記が問題になります。日本の十七管笙では簧を無くした也、亡(毛)と、十九管笙にあったと見られる斗、トの四つの譜字で示すことになりませんが、これらの音律は『統教訓鈔』などをみる限り平安末期の楽人らにとっても不確かであつたらしく当時の文献にも混乱が見られます(さらに悪いことに、古くは鸞鏡と断金の呼称を逆にする説もあつたため

混乱に拍車がかかっています)。

しかし笙の音律と方磬の音律の配置の基本的な一致によって、両者が唐代の楽理を踏まえていることがより一層明確になるといえましょう。そして両者の関係からとくに注目に値するのは上段右二つ(十七管笙には無い管にあたる部分)に「義管」と記している例があることです(『統教訓鈔』所引の中原有安が記した古譜の説)。このことは唐・宋はもとよりのこと日本でもかつては義管(替え管)を用いた例があつた可能性を示唆しているのかも知れません。例えば双調は本来仲呂均商調(g、a、h、c、d、e、f)なので十七管笙には応じていませんが、ト(f)を用いれば、理論に一致した音律が得られます。義管の問題に加えて、笙が黄鐘(a)を最低音とするのに対し、方磬は完全四度上の壹越(d)を最低音としている点も注意すべきことのように思います。方磬と笙の関係については、かつて林謙三氏がいくつかの論考を著しましたが、その後ほとんど研究が進展していません。筆者もまだ考えがまとまっていませんが、上記の問題などを『體源鈔』を手がかりに少しずつ考え進めていきたいと思っています。

前号に掲載できなかった

演奏会など

○松戸市70周年記念 宮中雅楽(千葉)

6月1日(土) 午後2時半

管絃 平調音取 催馬楽 更衣 五常楽急

陪臚 舞楽 陵王 納會利 萬歳楽

演奏 宮内庁式部職業部

○交歓 雅楽演奏 菖蒲の宴18回(九州)

6月16日(日)夜
会場 天理教福岡教務支庁

○第40回雅楽ゼミナール 天王寺楽所雅亮会
6月26日(水) 午後6時半 四天王寺所蔵
舞楽面の修復と模作 能面打ち 見市泰男

夏々秋までの主な雅楽演奏会など

雅楽を楽しみましょう(石川)

7月1日(月) 午後6時半 1000円

石川県立音楽堂交流ホール

雅楽の形而上学 夏、秋、冬の越天楽 他

演奏 洋遊会 講師 上野慶夫、野原耕二

主催 (公財) 石川県音楽文化振興事業団

問合せ Tel.076-232-8111

近江神宮 燃水祭(滋賀)

7月5日(金) 午前11時

舞楽 延喜楽 出演 女人舞楽原笙会

問合せ Tel.0797-23-1886

「七夕の雅楽」雅楽第三回定期公演(東京)

7月7日(日)

東京オペラシティコンサートホール

午後1時~1時45分 子供たちのための公開

リハーサル 無料 事前申込(申込は締切つ

ている) ロビーに体験コーナーを設置

(協力 宮本卯之助商店)

午後4時 S席5000円 A席4000円

管絃 黄鐘調 音取 海青楽

越天楽残楽三返 西王楽

舞楽 桃李花 還城楽(右)

演奏 東京楽所 主催 株式会社AMATI

問合せ Tel.03-3560-3010

星祭り 師岡熊野神社(神奈川)

7月7日(日) 午後7時

管絃 平調音取 雞徳 陪臚

舞楽 白濱 納曾利 演奏 横浜雅楽会
問合せ Tel 045-531-0150

難波八阪神社夏祭船渡御神事(大阪)

7月13日(土) 午後6時~8時頃
大阪 道頓堀川周辺 拝観無料
舞楽 落蹲 他 演奏 博雅会

問合せ Tel 080-2415-2347

文月会 第17回雅楽演奏会(東京)

7月20日(土) 午後2時半 無料
赤坂区民センター3階区民ホール
管絃 黄鐘調音取 青海波 拾翠楽
舞楽 萬歳楽 仁和楽

問合せ Tel 090-1859-6962

夏祭 西宮神社(兵庫)

7月20日(土) 午後7時半 8時半(2回)
舞楽 柳花苑 拍棒 女人舞楽原笙会
問合せ Tel 0797-23-1886

雅楽月見の宴(千葉)

7月24日(水) 午後7時
ホテル一宮シーサイドオーツカ下海岸
管絃 平調 老君子 嘉辰 太食調 抜頭
長慶子 演奏 玉前雅楽会
問合せ Tel 0475-42-2711

雅楽「伝統と現代」(金沢)

7月27日(土) 午後5時 4000円
2500円 石川県立音楽堂邦楽ホール
管絃 平調音取 越天楽 陪臚 現代舞楽
舞楽算命楽 作曲/振付 三輪真弘
舞楽 還城楽 演奏 東京楽所
主催(公財) 石川県音楽文化振興事業団
問合せ Tel 076-232-8111

のつうてつコンサート「奏でる弦」(東京)

8月2日(金) 午後7時
全席指定 5500円 学生席2000円
神楽坂矢来能楽堂

雅楽・能楽の古典曲、新作曲など
出演 舞/観世喜正 笛/一噌幸弘
津軽三味線/小山豊 邦楽打楽器/望月太喜
之丞 笙/石川高 箏/中村仁美 龍笛/
八木千曉 琵琶/中村かほる
問合せ Tel 03-3266-1020

第59回 篝の舞楽 四天王寺(大阪)

8月4日(日) 午後7時
四天王寺伽藍内講堂前庭
舞楽 振鉦 桃李花 林歌 甘州 長慶子
演奏 天王寺楽所雅亮会
問合せ Tel 06-6771-0066

天理大学雅楽部北海道公演(北海道)

8月6日(火) 札幌市教育文化会館
7日(水) 小樽マリンホール
10日(土) 北斗市総合文化センター
13日(火) 旭川市公会堂
各公演共午後2時開演
3000円 前売り 2000円
学生(中学生まで) 1000円
演目 伎楽 迦楼羅
雅楽 管絃 平調音取 越殿楽 陪臚
謡物 催馬楽 我家
舞楽 納曾利 太平楽
問合せ Tel 0743-63-4945

雅楽の夕べ 大崎八幡宮(仙台)

8月12日(月) 午後7時
演目 青葉の舞 萬代の舞 其駒 合歡塩
抜頭他 演奏 伶楽舎
問合せ Tel 022-234-3606

雅楽の夕に、一緒に雅楽を(仙台)

8月13日(火) 午後4時 大崎八幡宮
青葉の舞 萬代の舞他 演奏 伶楽舎
問合せ Tel 022-234-3606

中元万燈籠 春日大社 直会殿(奈良)

8月14日(水) 午後6時半ごろ
舞楽 蘭陵王 演奏 南都楽所
問合せ Tel 0742-22-7788
春日山盆灯会(福岡)
8月15日(木) 午後8時
正行寺春日山雅楽御堂(福岡県春日市)
舞楽 迦陵頻 胡蝶 演奏 筑紫楽所
問合せ Tel 092-596-8585
一宮川燈籠流し(千葉)
8月16日(金) 午後7時半
一宮川河口特設舞台
舞楽 迦陵頻 演奏 玉前雅楽会
問合せ Tel 0475-42-2711

再びの出会い二つの国の雅楽(横浜)

日本・ベトナム外交関係樹立40周年記念
チケットプレゼント有り
9月7日(土) 午後2時 横浜能楽堂
6000円 5000円 4000円
チケット発売 7月13日(土) 正午より
日本の舞楽 胡飲酒 陪臚
演奏 南都楽所
ベトナムの大衆合奏「三輪九轉」 宮廷舞踊
「提詳集慶」 小衆合奏「十首連環」 宮廷舞踊
「麒麟の舞(麟母出麟児)」 軍太鼓・オーボエ
の二重奏 宮廷舞踊「花燈の舞」
演奏 フェエ遺跡保存センター宮廷音楽合奏団
日本・ベトナム合奏曲「仏哲に捧げる」
(作曲/芝祐靖) 主催 横浜能楽堂
申込み・問合せ Tel 045-263-3055

天野社の舞楽曼荼羅供 国立劇場(東京)

9月14日(土) 午後2時 国立劇場大劇場
一等5000円 二等3600円
チケット発売開始 7月11日午前10時より

観月祭 西宮神社(兵庫)

9月19日(木) 午後6時
舞楽 曲目未定 演奏 平安雅楽会
問合せ Tel 075-781-0010

名月管絃祭 下鴨神社(京都)

9月19日(木) 午後6時
舞楽 曲目未定 演奏 平安雅楽会
問合せ Tel 075-781-0010

放生会舞楽 石清水八幡宮(京都)

9月15日(日) 午前8時 舞楽 胡蝶
午前10時 舞楽奉納 蘭陵王 納曾利
演奏 平安雅楽会
問合せ Tel 075-981-3001

「雅楽」宮崎県立芸術劇場20周年(宮崎)

9月15日(日) 午後2時
3000円 2000円 1000円(学割)
メデイキット県民文化センター プレトック
(多忠輝、野原耕二、青木芸術劇場館長)
管絃 平調音取 越天楽 陪臚
舞楽 蘭陵王 落蹲 演奏 東京楽所
主催 公益財団宮崎県芸術劇場
問合せ Tel 0985-28-3208

聲明 眞言聲明の会(高野山 南山進流)

雅楽 十二音会 天王寺楽所雅亮会 南都楽所
監修 遠藤徹(東京学芸大学准教授)
協力 丹生都比売神社(天野社)
チケット申込 Tel 0570-07-9900

入堂作法 庭讀(雅楽)

入堂作法 庭讀 舞楽 振鉦一・二節
道場作法 惣礼 供花 管絃 鳥向楽
二箇法要 唄 散華 対揚 管絃 慶雲楽
供養法 五悔 勧請 舞楽 陵王
五大願 普供養 中曲理趣経
合殺 管絃 裏頭楽
後讀 後唱礼 廻向 舞楽 拍棒
還列作法 還列讀 管絃 長慶子
聲明 眞言聲明の会(高野山 南山進流)
雅楽 十二音会 天王寺楽所雅亮会 南都楽所
監修 遠藤徹(東京学芸大学准教授)
協力 丹生都比売神社(天野社)
チケット申込 Tel 0570-07-9900

放生会舞楽 石清水八幡宮(京都)

9月15日(日) 午前8時 舞楽 胡蝶
午前10時 舞楽奉納 蘭陵王 納曾利
演奏 平安雅楽会
問合せ Tel 075-981-3001

「雅楽」宮崎県立芸術劇場20周年(宮崎)

9月15日(日) 午後2時
3000円 2000円 1000円(学割)
メデイキット県民文化センター プレトック
(多忠輝、野原耕二、青木芸術劇場館長)
管絃 平調音取 越天楽 陪臚
舞楽 蘭陵王 落蹲 演奏 東京楽所
主催 公益財団宮崎県芸術劇場
問合せ Tel 0985-28-3208

舞楽 柳花苑 他 女人舞楽原笙会
問合せ Tel 0797-23-1886

仲秋管絃祭 日枝神社(東京)

9月19日(木) 午後6時 3000円
演目 未定

問合せ Tel 03-3581-2471

三溪園観月会(神奈川)
9月21日(土) 午後6時 三溪園臨春閣
東遊(駿河歌 舞なし)

管絃 平調音取 皇聲急 萬歳樂
舞楽 白濱 納曾利 演奏 横浜舞楽会
問合せ Tel 045-531-0150

雅楽 東京楽所(埼玉)

9月21日(土) 午後6時半 2000円
1000円(学生) こしがや能楽堂(雨天の
場合9月23日(月)に順延)

管絃 平調音取 越天楽 陪臚
舞楽 蘭陵王 演奏 東京楽所

主催 公益財団法人越谷市施設管理公社
問合せ Tel 048-985-1112

春日山秋季彼岸会(福岡)

9月23日(月・祭日) 10時
正行寺春日山雅楽御堂(福岡県春日市)

舞楽 五常樂 演奏 筑紫楽所
問合せ Tel 092-596-8585

雅楽鑑賞会(仮) 足立山妙見宮(福岡)

9月29日(日) 午後5時
舞楽 賀殿急 五節舞 納曾利
女人舞楽原笙会

問合せ Tel 0797-23-1886

音の息吹(東京発・伝統WA感動)(東京)
10月5日(土) 午後6時半 一般4000円
学生2000円 東京文化会館大ホール

管絃 芝祐靖作曲「舞風神」(伶楽舎)
他に能楽囃子、尺八、邦楽とダンスなど

問合せ Tel 03-3467-5421

今宮神社宵宮・秋の大祭(京都)

10月8日(火) 午後7時 宵宮祭 御神楽
9日(水) 午前10時 秋の大祭 東遊
演奏 平安舞楽会

問合せ Tel 075-491-0082

下鴨神社 大国歌(京都)

10月9日(水) 午後2時
舞楽 未定 演奏 平安舞楽会

神奈川舞楽部第17回雅楽演奏会(神奈川)

10月10日(木) 午後7時 1500円
かなつくホール(JR東神奈川駅徒歩1分)

管絃 老越調 音取 菩薩破 志團嬌
声明と舞楽 五悔(付楽)
舞楽 喜春樂 納曾利 長慶子
問合せ Tel 045-931-1573

★読者チケットプレゼント★

☆横浜能楽堂 9月7日(土)
2名様ご招待 8月24日必着 招待券送付

☆国立劇場大劇場 9月14日(土)(東京)
2名様ご招待 8月31日必着 招待券送付

☆神奈川舞楽部 10月10日(木)
かなつくホール(神奈川) 10名様ご招待
9月26日必着 招待券を送付

応募資格・「雅楽だより」定期購読者
応募方法・はがきに希望の演奏会、住所、氏名、
電話番号など必要事項を記入。
応募先・〒188-0013
東京都西東京市向台町6-12-6 鈴木方

「雅楽だより」編集部

舞楽面陵王の無料貸し出し

日本仮面文化研究所(所長・梁取弘美)で
は、優れた本物の舞楽面の素晴らしさを知っ

て欲しいというこ
とから舞楽面陵王
の無料貸し出しを
始められた。陵王
面はいろいろな型
から選べる。なお高価なものなので貸出しは
直接の受け渡しのことです。



問合せ・申込は、日本仮面文化研究所
Tel 0470-66-2466
〒298-0025 千葉県いすみ市山田
5264-2 梁取弘美 まで

新聞・テレビなど

○『パイパーズ』管楽器専門月刊誌に
鶴殿ヨシを守る記事が続けて掲載される

3月号「管楽の最良のリード材産地を守れ」
4月号「良いリード?悪いリード?」
5月号「管楽の音が消えてしまう」
6月号「管楽の蘆舌の魂が宿る鶴殿のヨシ
原を守るろ」

発行 杉原書店
問合せ Tel 03-5205-3666
<http://www.pipers.co.jp/>

○5月18日東京新聞
「管楽のヨシ原に高速道やめて 保全求め
る声 海外からも 雑誌掲載、署名も続々」
と国際ダブルリード協会(IDRS)(本
部・米国)のヨシ原保存を求める檄文を紹
介

○「雅楽・TV」昨年11月より始まる
雅楽の楽人や職人などを訪ねる月1回の30
分番組で、案内役は音輪会の川口智徳さん
ほか。YouTubeで見ることができ
る。第1回は芝祐靖先生へのインタビュー。

芝祐靖先生へ質問を

芝先生へご質問がありましたらメールかFaxで
お寄せください。お待ちしております。「雅楽
いろいろQ&A」のコーナーでお答えしてい
ただいています。

寄付のお願い

ご協力頂ける方、寄付をお願い致します。お
振込は、購読料の口座へ、通信欄に「寄付」
とご記入ください。

「雅楽だより」

購読料一年(4回発行)千五百円。(送料込)
郵便振込用紙に住所、氏名をご記入のうえ、
「口座番号」00140051614032
「加入者名」雅楽協議会
までお振込みください。ご記入頂いた住所に
「雅楽だより」を送らせて頂きます。数年分
まとめでの振込みも受け付けています。

「雅楽だより」第34号
2013(平成25)年7月1日
発行 雅楽協議会
編集 雅楽協議会「雅楽だより」編集担当
連絡先 〒188-0013
東京都西東京市向台町6-12-6(鈴木治夫)
TEL・042-4511-8898
FAX・042-4511-8898
メール gagakudayori@yahoo.co.jp
<http://www.gagakuhonpaikai.com/>

印刷 秀英堂紙工印刷株式会社

雅楽の楽器・譜面 ほか

(株) 武蔵野楽器

〒114-0003 東京都北区豊島1-5-6
電話 03-5902-7281
Fax 03-5902-7282

〒114-0003 東京都北区豊島1-5-6
電話 03-5902-7281
Fax 03-5902-7282